

「絵を読む会」黎明期の記録

—「石川幼年美術の会」の挑戦—

森 田 ゆかり

The Record of the Dawn of " Meetings for Reading Pictures "

—Challenge of " Ishikawa Children's Art Association "—

Yukari Morita

「絵を読む会」黎明期の記録

—「石川幼年美術の会」の挑戦—

森田 ゆかり*1

Dawn Record of " " "
—Challenge of " Ishikawa Children's Art Association "—

Yukari Morita

I はじめに

2017年11月、石川県白山市で「第1回石川幼年美術の会・実践研究会」が開催された。実技研修(110分)、特別講演(90分)に続き、石川ではおそらく初めての「絵を読む会」(120分)が行われた。

「幼年美術の会」は、子どもの美意識と成長を願う先生方によって、1963年(昭和38年)京都で設立された。テーマである“一人ひとりの子どもの心が育つ『表現』”を通して、豊かな人間形成のあり方を参加者全員で思索、実践し、交流を積み上げていく会である。同会が最も大切にしている「絵を読む会」を石川で実現することが、「石川幼年美術の会」設立のいちばんの理由であった。しかし2017年11月の時点で、他県などで「絵を読む会」を経験したことのある者は、筆者を含めてわずか3名であった。

2年の時を経て、2019年10月までに、3回の「実践研究会」、10回の「スタッフ研修会」の中で合計10回の「絵を読む会」が行われた。

「第3回実践研究会」(2019年10月)では、石川幼年美術の会の「絵を読む会」の基盤らしきものが形になった実感がある。

「石川幼年美術の会」設立の背景および2年間のプロセス、特にスタッフの変容については『紀要43号』¹⁾でまとめたが、本稿では「絵を読む会」が創られてきた過程についてまとめておきたい。

第1回 石川幼年美術の会・実践研究会

日時 2017年11月11日(土) 9:00~16:30

会場 白山市民交流センター

参加者 100名

主催 石川幼年美術の会

共催 白山市保育士会

後援 公益財団法人 美育文化協会

協力 金城大学短期大学部

協賛 べんてる株式会社

内容

《実技研修》 講師：大塚義孝先生(110分)

「クレヨン・パス・コンテを遊ぶ」

《特別講演》 講師：大橋功先生(90分)

「子どもの思い、保育者の願いが重なる造形活動」

《絵を読む会》 子どもの絵から保育を語る(120分)

*1 金城大学短期大学部幼児教育学科

実技研修や講演は、その時々最適な講師を招き、最適な内容を提供すれば成立するが、「絵を読む会」は参加者が主体となり参加者がつくりあげる会である。アクティブ・ラーニングと同様に、その鍵を握るのはファシリテーターである。「第1回実践研究会」（2017年11月）から「第3回実践研究会」（2019年10月）までの2年間に10回のスタッフ研修会を開催し、そのうち7回で実際に「絵を読む会」を行なっているのは、①参加者全員が安心して発言できる空気をつくること、②「絵を読む会」の楽しさ・面白さ・意味を実感すること、③ファシリテーター役を担えるスタッフおよびファシリテーター役を支えるスタッフが育つことが急務だったからでもある。「絵を読む会」を創っていく難しさと面白さがここにある。

前述のように、「第3回実践研究会」を終え、石川幼年美術の会の「絵を読む会」の基盤らしきものがつくられた実感はあるが、①初心を忘れず、常に、初めて参加する人の気持ちになり「絵を読む会」を育てていくため、②今後、自園で先生方が子ども達の絵を読む時のため、③他の地域で新たに「絵を読む会」を始める時のために、試行錯誤のプロセスを記録に残しておく。

II 試行錯誤のプロセス 2017.11～2019.10

1) 「絵を読む会」に関する研修の記録

年.月.日	会名称（参加者数 / 「絵を読む会」のグループ数） 内容	絵を読む会
2017.11.11	「第1回 石川幼年美術の会・実践研究会」（参加者100名 / 6グループ） 《分からないながらも、まずはやってみる》 幼年美術の会副会長・京都幼年美術の会会長（当時）奥山淑子氏はじめ京都幼年美術の会の先生方6名が、各グループのファシリテーターおよび助言に当たる。「絵を読む会」に先立ち、滋賀幼年美術の会会長・黄瀬重義氏も含め、7名から「絵を読む会」について語っていただく。一からスタートする石川幼年美術の会にとって、「かたち」ではなく「本質」を聞き、温かい会の雰囲気を感じ取る貴重なひとときとなった。 参加者が持ち寄った絵を見ながらグループごとに語り合い共有することにより、子どもの育ちや思いが見え、日頃の保育の振り返りになり、保育改善のヒントが見つかった。	1回目
2018.5.19	2018年度 第1回スタッフ研修会（参加者46名） 《半年後、石川のスタッフがファシリテーターをできるように！を目指す》 2018年度スタッフ登録者54名（そのうち「第1回実践研究会」参加者27名）。 「第1回実践研究会」での体験、当日の各グループの記録をもとに、京都幼年美術の会の先生方が大切にされていたこと、やり方などについて話し合い共有する。進行マニュアル（案）を作成することになった。	
2018.7.7	2018年度 第2回スタッフ研修会（40名 / 3グループ）	2回目

	<p>《最初のつまずき 不安や戸惑いの気持ちを聴き合い共有》</p> <p>各自子どもの絵を5枚持ち寄る予定であったが、持参する保育者がとても少なかった。絵がなければ「絵を読む会」はできない。しかし「初めてのこと」をする時には、イメージできないことや、「どんな絵を持っていけばよいのか?」「これは絵に入るのか?」などと戸惑いがあるのが当然である。持参出来なかったことを否定的に捉えず、不安や戸惑いの気持ちを聴き合いながら共有した。予定していたグループ数を減らし、戸惑いながらも持参した保育者のクラスの絵を見ながら「絵を読む会」をやってみた。</p> <p>絵を見ること、自分の見方と違う意見を聞くことはとても楽しい、「正解はない」という言葉に安心できるなどという感想が多く聞かれ、ほとんどの保育者が「次回は絵を持って来たい」とワークシートに記した。</p>	
2018.9.1	2018年度 第3回スタッフ研修会 その1 (26名 / 4グループ)	3回目
2018.9.10	2018年度 第3回スタッフ研修会 その2 (20名 / 2グループ)	4回目
	<p>《ほとんどの保育者が子どもの絵を持参》</p> <p>諸々の事情により二手に分かれ、2週連続で開催。ほとんどの保育者(クラス担任)が子どもの絵を持参し、「絵を読む会」の良さも実感できたようである。二手に分かれ開催したことにより、それぞれのメンバー構成に合わせたねらいが生まれ、小規模ならではの面白さもあった。</p> <p>ファシリテーター役が専念できるよう、グループ内で、時間を気に掛ける人、疑問点などを付箋に書き留める人を決めておくことにした。</p>	
2018.10.6	2018年度 第4回スタッフ研修会 (43名 / 7グループ)	5回目
	<p>《自然体に近づく》</p> <p>4回のスタッフ研修を通して15名が「絵を読む会」のファシリテーター役を1,2回体験した。ファシリテーター役以外のスタッフも、絵を持ってくると、絵を読むこと、絵を通して子どもや保育のことを語ることに少しずつ慣れてきた。回を重ねるごとに自然体に近づき、「絵を読む会」の楽しさも分かってきて、「第2回 石川幼年美術の会・実践研究会」を何とかやれそうな手応えを感じた。</p>	
2018.10.27	第2回 石川幼年美術の会・実践研究会 (120名 / 11グループ)	6回目
	<p>スタッフ研修を重ね「自家製」では初めての「絵を読む会」であった。スタッフ11人が勇気を出してファシリテーターを担当したことにより、1グループの人数が11人程度と話しやすく、聴きやすくなり、とても和やかな会になった。各グループにスタッフ約4名を配置し、スタッフが率先して絵を持参したこと、積極的に楽しく話し合う空気を創り出したことが、ファシリテーターを支えた。リーダーも参加者も輝いていた。</p> <p>「絵を読む会」で語り合うことにより多くのヒントを得ることができたが、「どうなんだろう?」「どうすればいいんだろう?」という疑問も残っ</p>	

	た。付箋に書き出し、特別講演の講師・大橋功氏と筆者が約40分かけて共有とまとめをした。正解はない。あくまでも「かもしれない」というまとめである。	
2018. 11. 24	2018年度 第5回スタッフ研修会 (21名) 《振り返り》	
2019. 6. 22	2019年度 第2回スタッフ研修会 (54名 / 8グループ) 《誰でもファシリテーターができるように！を目指す》 2019年度スタッフ登録者75名 (そのうちスタッフ経験者31名、第1回または第2回「実践研究会」一般参加者18名)。 前年度までの参加者の体験と学びをもとに、スタッフなら誰でも「絵を読む会」のファシリテーターをできるように、やり方や留意点などについて話し合い「絵を読む会」を行う。	7回目
2019. 7. 20	2019年度 第3回スタッフ研修会 (42名 / 7グループ) 《スタッフの役割を再確認》 「絵を読む会」の前に、スタッフの役割について再度確認する。10月26日の「第3回実践研究会」当日・前日にはそれぞれの役割があるが、いちばんの役割は「石川幼年美術の会」の空気をつくり出すことである。参加者一人ひとりが安心して気持ちよく一日を過ごすことが出来るよう、 ・ 笑顔で迎える。 ・ スタッフが率先して楽しむ。 ・ クラス担任のスタッフは率先して絵を持ってくる。 ・ 「絵を読む会」の時には率先して絵を読み、話し、聴く。 ・ 参加者の様々な思い・考えを尊重する。など <u>スタッフの意見により、年齢別にグループを組んでみる。(4歳児、2歳児のグループが2つ、5歳児、3歳児、0, 1歳児のグループが1つ、計7グループ)</u> 前回まではおもに園長・主任などがファシリテーター役を担っていたが、今回は若いスタッフが率先してファシリテーター役に挑戦。「上から言われて」「指示に従って」動くスタッフではなく、「学びたい人が自らの意思で集まり、参加者一人ひとりが主体となり創り上げる」石川幼年美術の会の空気が、スタッフ研修を通して出来つつある。	8回目
2019. 9. 14	2019年度 第4回スタッフ研修会 (42名 / 4グループ) 《Max150名参加を想定し、「第3回実践研究会」当日のレイアウト(案)で「実技研修」「絵を読む会」をやってみる》 (案) ・ 「 <u>実技研修</u> 」と「 <u>絵を読む会</u> 」のグループは同じメンバーにする。机・椅子の移動もしない。(午前の実技研修を通して自然に関わりが生まれ、	9回目

	<p>午後の「絵を読む会」が和やかな雰囲気の中で始められ、話しやすい)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>1グループ10名×Max15グループ</u>で計画する。(ファシリテーターを担えるスタッフも15名以上いる) <p>「絵を読む会」の人数は10名でよいが、「実技研修」の時に机上の1人当たりのスペースが狭くないか？ 全員が椅子に座った状態で、途中で材料を配る人、取りに行く人、手を洗いに行く人などの動線を確保できるか？</p> <p><u>「絵を読む会」の時に、互いのグループの話し声が妨げにならないか？</u> <u>などを確認する。</u></p>	
2019. 10. 26	<p>第3回 石川幼年美術の会・実践研究会 (100名 / 11グループ)</p> <p>《学生23名も自分が関わった0,1,2歳児の絵を持参し、主体的に参加する》</p> <p>最終的に、<u>1グループ8,9名×11グループ</u>で計画する。</p> <p>「第2回実践研究会」から 本学幼児教育学科「KINJO 特化美術表現」履修学生が参加しているが、「第3回実践研究会」の「絵を読む会」では、<u>学生自身が関わった0,1,2歳児の絵を持参した。</u> 保育者の中に入ると緊張や遠慮もあり受け身になりがちであるが、学生は絵を持参することにより役割が与えられ、石川幼年美術の会の温かい雰囲気の中で、当日のドキュメンテーションをもとに子どもの様子などを語った。参加者からも「絵を読む会」での学生の存在が新鮮に受けとめられ、双方にとって貴重な体験となった。</p> <p>グループによる「絵を読む会」の後、付箋に書き出された疑問・質問に対し、<u>講演の講師・松岡宏明氏、実技研修講師・黄瀬重義氏と筆者が約40分かけて共有とまとめをした。</u>いつものように正解はない。あくまでも「かもしれない」というまとめである。「実技研修」「講演」「絵を読む会」がすっきりとひとつつながりになった。</p>	10回目



「絵を読む会」の進め方 ファシリテーターの視点から (案)

【1】 一人ひとりが安心できる雰囲気をつくる。

<言葉かけの参考例>

- 「絵を読む会」に参加して下さったことに関するねぎらい (お礼) の言葉かけをする。
- 和んだ雰囲気になるように笑顔で話しかける。

- ・今日は (午前中の保育でお疲れのところ) 「絵を読む会」にご参加いただきありがとうございます。今から「絵を読む会」を始めます。
- ・私は〇〇グループの進行を担当させていただく〇〇と言います。初めてで不慣れですが、よろしくお願いいたします。
- ・持ってきていただいた子どもの絵を見ながら、意見交換していきましょう。

【2】 グループのメンバーを知る。

- 緊張感を解消するために自己紹介から始める。
 - ① 所属 (園名)
 - ② 名前
 - ③ 担当年齢など

- ・初めに簡単な自己紹介をしましょう。
- ・「所属」と「お名前」「担当年齢など」をお聞かせください。

※追加 時間を気にかける人、記録する人を決める

【3】 絵の持参者から年齢と枚数を確認する。

- 何人の方が何枚絵を持参して下さったか、年齢別に確認する。
- 時間内に全部の絵を見て意見交換ができるように時間配分して進行する。

- ・絵を持ってこられた方、年齢別にお聞きしますので手を挙げてください。
(0 → 5歳児の順に人数と枚数の把握をする)
- ・それでは、小さい年齢の絵から見いきましょうか？

【4】 絵の持参者に「話す内容」、

絵を読む側には意見を出していただくことを伝える。

- 持ち寄られた絵をみんなで丁寧に読み合えるよう、話してもらいたい内容を話す。
- また、参加者全員にいろいろな意見を出していただけるように誘いかける。

- ・今から絵を紹介していただきますが、まず園名、お名前、経験年数、子どもの年齢、クラスの状況（子どもの人数など）を簡潔に話し、次に、その絵が生まれた背景、何か気になることや迷っていることなど、皆さんにお聞きしたいことをお話しいただけたらと思います。
- ・これまでにいろいろな年齢を経験されている方もおられるので、皆様から経験談などをお聞きしながら、意見交換していけたらと思います。

【5】 絵を見ながら、話を聴きながら、充実した時間になるようサポートする

- やさしい表情で、うなずきながら聞く。
- 意見が出にくい時は、こちらから具体的に問いかける。
- 特定の人に偏らないよう、できるだけ多くの人から話が出るように誘う。
- 同じように思う人、違う意見をもつ人がいるが、「保育に正解はない」ことを前提にして、いろいろな意見を尊重できる場をつくる。
- 特に話題になったことや解決したい問題点、全員と共有したいことなどについては、記録者が付箋に書き出しておく。

- <最初に>
 - ・時間設定をしておきましょう。（年齢と枚数を把握したうえで具体的に）
 - ・（話される時は「〇〇園の〇〇です」と言ってからご発言ください。）
- <意見が出にくい時>
 - ・他に何かお聞きになりたいことはありませんか？
 - ・〇歳児を担当されている方はどうされていますか？
 - ・各園ではどうされていますか？
 - ・同じようなことで困っていらっしゃる方はいらっしゃいませんか？ など
- <問題になったこと・解決したい話題>
 - ・いろいろなご意見がでましたが、この問題につきましても、助言をいただきたいと思います。
- <最後に>
 - ・今日は参加者の皆さんといろいろな意見交換ができました。ありがとうございました。
 - ・絵を読むことは、「子どもをどう見るか」「保育をどう見るか」など、保育の見直しにつながると思います。今日の「絵を読む会」での学びを明日からの保育に活かしていきましょう。

Ⅲ 「絵を読む会」に関するスタッフのコメント

1) 2018. 11. 24 2018 年度 第 5 回スタッフ研修会（最終） 振り返りのワークシートより

- ファシリテーターは初めてだったが、メンバーの方々が前向きな意見をどんどん出してくれたのでよい話し合いになった。達成感がありありがたく思った。「絵を読む会」を園でもやってみたいと思うようになった。
- 「絵を読む会」への参加の仕方というか、姿勢がとても変わったように感じる。スタッフ研修会で経験を繰り返すことで、様々な絵の見かたが出来るようになってきた。
- 初めは「実技研修」が楽しみだったけれど「絵を読む会」の方がもっと楽しみになりました。園内でも出来たらよいなと思うようになりました。
- 「絵を読む会」は何度も参加するにつれ意見も言えるようになった。色々な意見や考えが聞け、自分にはない考えを聞いたりすると、子どもは面白いな、楽しいなと思うことが多くあった。

2) 2019. 7. 20 2019 年度 第 3 回スタッフ研修会 振り返りのワークシートより

前回まではおもに園長・主任などがファシリテーター役を担っていたが、若いスタッフが率先してファシリテーター役などに挑戦した「スタッフ研修会」後のコメントをピックアップする。

- 今回ファシリテーターをしました。時間を気にかけてくださる方がいて、時間を気にせず進めることが出来ました。記録の方が随時、疑問点としてあがったことをまとめて書いてくれたので、後からでも思い出せました。
- ファシリテーターを初めて体験しました。前回ファシリテーターをしている人を見て、これなら次回「機会があれば体験してみよう」と思いました。全てをファシリテーター任せにする雰囲気はなく、周りの方々が進んでいろいろな話をしてくれ、とても良いサポートをしてもらったと感じました。ファシリテーター役であるだけで、(サポート役や、良い雰囲気づくりをする仲間がいると分かっている)緊張したり、不安に思ったりするものなので、役割を実際に体験することで、それぞれの役割の気持ちや、必要な助けを知り、話をしたり、サポートをしたりしていけると思いました。
- 同じグループの先生方の和やかな雰囲気と笑顔を見て、「ファシリテーターに挑戦してみよう」という気持ちになりました。話が次々に弾み、子どもの表情を思い描きながら、とても楽しく進行させていただきました。貴重な体験をありがとうございました。
- 初めてファシリテーター役をしてみました。会を重ねてきたことで、皆さんが進んで意見を出してくださり、スムーズに進んでいきました。ファシリテーターが進行しなくても大丈夫な程だったので、「空気づくり」を心がけました。
- ファシリテーターをしました。ドキドキしましたが、皆さんがしっかりと話をしてくれました。やはり時間を忘れてしまうことがあったので、フォローしてくれる方がいて助かりました。
- 記録係をしてみて、発表している方の声をより注意して聴き、何がいちばん困っていてみんな

に質問したいのかを読み取ろうとしていることに気がきました。その間にも絵はじっくり見られるし、思いも伝えられたと思います。

3) 2019. 10. 26 「第3回石川幼年美術の会・実践研究会」アンケートより

- 「実技研修」と「絵を読む会」のグループが同じであったため、話しやすい雰囲気が進めることが出来ました。障害者支援施設の職員の方も絵を持ってきてくださり、これまでの「絵を読む会」を超えた面白さがあり、とても楽しかったです。
- 「絵を読む会」の前に先生から「誰でも話しても良いんだよ」と言っていたから、安心して話すことが出来た。
- 初めて石川で行なった時より、グループの人が全体的によく意見を言うようになったと感じた。
- 今年からスタッフとして参加させていただき、昨年までとは違う見方も出来ました。スタッフの方々が温かく見守ってくださるので、「絵を読む会」も緊張せずに話すことが出来ました。スタッフ研修で経験を重ねてきたことが自信につながったと思います。今年は学生の方々も絵を持参して、自分の言葉で思いを伝えていたので、とても好感が持てました（一生懸命頑張っていると感じました）。一人一人が自分の思いを発表する場が必ずあり、全員で共感し研修を一緒にしているという感覚がすごくありました。
- 絵を見ることで、発達段階と照らし合わせるものではなく、その子を受け入れるという大切なことに毎回気づかされます。現場に戻ると以前の（昔の）こうあるべきという製作観念にとらわれてしまうが、幼美に参加することで子どもの見方が修正される。
- 学生さんの意見が特に新鮮に感じた。また、とても話しやすい雰囲気、誰一人「否定」をしないで受けとめてくれたので、緊張せず話すことが出来たように思う。
- 学生の方もたくさん自分の考えを持っていて、伝えてくれる姿が印象的でした。今学んでいる学生さんが現場に出てきた時に、造形活動が広がっていくのが楽しみだと感じました。
- 研修に何度か参加するにつれて、違う市の方々とも顔見知りになり、お互いに気軽に情報交換ができ、嬉しく思いました。
- 「講演」の後の「絵を読む会」だったので、違った見方で絵を見ることができた。保育者がどのようなねらいで行なった活動なのか、生活の背景も聞くことで、今後意識していきたいと思うことがたくさんあり、大変勉強になった。
- 絵の背景にある子どもとの楽しい時間も想像でき、このような輪がどんどん広がっていくといいと思いました。
- 改めて、子どもの表現や気持ちを大切にしていこうと思った。

IV まとめ

前号『紀要43号』¹⁾で以下の一文を記した。「絵を読む会」を重ね、その文化が少しずつ根付き、誰でも気軽にファシリテーターができるようになることが次なる夢である。そうなれば園内で日常的に「絵を読む」ことができる。

この2年間で、スタッフのほとんどがファシリテーターに挑戦しようとする気持ちを持った。参加者が一人ひとりの思いや考えを尊重し、決して否定しない空気があること、誰かが答えを教えてくれるのを待つ訳ではなく、参加者全員が主体になり共に「絵を読む会」をつくりあげる意識が育ったことによるものであろう。未知の世界に一步踏み出し、分からないながらに何回か「絵を読む会」を重ねてきたスタッフの熱心さにも支えられている。「他の人と異なる考えを話しても大丈夫」という安心感、「自分とは異なる見方をきくことが面白く、視野が広がる」という新たな見方、「子どもの絵を読むことは子どもの心を見ることであり、自身の保育を振り返ること」という実感、「子どもの造形活動が特別なことではなく保育そのものである」ことへの気づきから生まれる熱心さかもしれない。筆者の、スタッフへの信頼感が、未熟な学生に子どもの絵を持参させ子どもの様子を語らせる挑戦につながっている。



この2年間は「絵を読む会」の基盤づくりの時期であった。年1回の「実践研究会」の参加者数を増やすことは目指さず、年間5,6回の「スタッフ研修会」を大切にし、伝統ある「絵を読む会」の本質を踏まえながら石川の現況に合った方法を模索してきた。未知の世界に一步踏み出したスタッフの不安や戸惑い、率直な感想は宝である。その思いに寄り添いながら試行錯誤をしてきた結果が「かたち」になってきた。ほとんど広報活動をしなかったが、障害者施設の支援員、「KINJO 特化美術表現」履修者以外の2年生、1年生、金城大学こども専攻の学生各1名が参加したことはとても嬉しいことであった。京都幼年美術の会、香川幼年美術の会の先生方3名から早々と参加申込があったことも大きな支えになった。

Ⅲ 3)のスタッフのコメントに「このような輪がどんどん広がっていくとよいと思いました」とある。どのように広がっていくことが望ましいのかは次なる課題であろう。輪が広がっていく時に黎明期の初心を忘れず、初めて参加する方々の不安や戸惑いを思い遣り、結果として子どもの心を耕す仲間が少しずつ増えていくことを願っている。

引用文献・参考文献

- 1) 森田ゆかり(2019):「石川幼年美術の会」設立の背景および2年間のプロセス—スタッフの変容—
一. 金城大学短期大学部紀要 第43号